

九州朝陽会報

平成三年七月一日発行第二十二号

三代目校舎の

「木版画」を眺めながら

九州朝陽会特別会員

佐藤 喜一（新1回）

昨年われらが新宿高校は創立九十年を迎えた。学校も同窓会も、9月29日に盛大な祝賀会を催して、「卒寿」を祝った。

母校では、創立五十周年から十年毎に記念誌を刊行している。「五十年の歩み」・「六十周年記念誌」は、在職中だった私が中心となって編集し、「七十年」・「八十年」はその当時、卒業生で母校勤務をされていた方々が中心となって、製作された。

記念誌の表紙は、「六十年」を除いてすべて校舎のスケッチ、もしくは

写真を使用した。「九十年」はどうする？ 私は担当ではなかったけれど、思い切って若い木版画家に三代目校舎の絵を制作させてみたらいかがかとひらめいた。

54回生（平成14年3月卒）に、百瀬晴海さんという木版画家がいる、ということを知り、私が辞めた（昭和62年）年に赴任されてこられた今泉浩子という国語の先生が、昨年初めにこの卒業生の存在を教えてくださいましたのだった。

花や鳥、街の風物を素材とした作品ももちろんある。しかし、届けられた作品の中には少なからず私の好きな「テツ」があったのだ。江ノ電・嵐電・京阪・阪急電車のそれぞれ百年、とか、「のぞみ」500系・「つばさ」400系のラストランとか、宇高連絡船百年・さらに茨城空港開港・歌舞伎座閉場式、などもあった。

ともすれば冷たい絵になってしまいうような対象が、この人の手にかか

るとあたたかみが感じられる。無機物にほのぼのとした生命を与える術を、この娘は知っていると思った。

そこで、「九十年の歩み」の編集委員の一人である太田正行君（新23回・昭和62年〜平成10年社会科教師）に、表紙の絵はこの人に校舎を木版画化させてみたらとすすめた。

これが5月26日。太田君、その日のうちに校長に進言、即決となった。絵を見たのは夏休みも過ぎてからか。A4サイズより少し大きめのその版画は、「夏の学び舎」と名づけられ、三代目校舎の正面をきちんと彫琢していた。先の電車たちと同じように、あたたかみとぬくもりとを感じさせる版画だった。

右下に花が咲いている。これは「ヒルガオ」である。戸田弘美校長、「偶然、咲いていたのを見つけたのよ」と言われた。この「ヒルガオ」が「学び舎」に文字通り花を添えてくれた。

そして……。僕の好きなのは、碧空と雲のコントラストだ。これが「学び舎」を引き立てている。とくに、この雲の静かで力強いたたずまいは、ここで学ぶ生徒たちの秘めた可能性を示しているように思われる。それは、さらによりよき新宿高校の未来をも示しているようにも、思われた。

いい表紙になった！ と私は校長や太田君とともに笑みを交わしあったのだった。

※

九州朝陽会の多くの方々は、この校舎はご存知ないだろう。やはり初代校舎（大正12年〜昭和44年）とか二代目校舎（昭和44年〜平成17年）がそぞろ懐かしいのでは？ 実



は、私もそうだ。

そして……。エレベーターもあり冷暖房装置も完備したこの七階建ての校舎、当然のことながら「禁酒・禁煙」だ。だから、同窓会総会も、会議は校舎内で開催できるが、懇親会はライオン会館ということになる。〈木々の翠を見やりつつ〉盃を傾けながら旧交をあためあうといったことは、不可能になった。ま、致し方なきか。

この絵見ながら、私は中原中也の「夏の日の歌」という詩の一節を思い出した。

上手に子供を育てゆく、

母親に似て汽車の汽笛は鳴る。

そう、三代目校舎よ、母なる「汽笛」を高らかに鳴らせ。若者たちの心の支えともなるべき「汽笛」を!!
そして若者たちよ、ひとりひとりのレールをしっかりと見つけて、着実に走れよ、と私は念じている。

(2013. 4. 23 寄稿)

編集者追記

文中の木版画の絵葉書が、佐藤喜一さんのご好意で九州朝陽会員へ送られてきましたので同封しています。

「軍師官兵衛」福岡舞台は

「経世家如水」

NPO 鴻臚館・福岡城歴史・観光・市民の
会理事長 元JRC九州社長/会長

石井幸孝(新3回)

大河ドラマ「軍師官兵衛」決まる

平成二六年一月からNHK大河ドラマ「軍師官兵衛」の放映が決まった。今夏からロケが始まり、黒田官兵衛・如水ゆかりの地ではブームへの期待が高まるだろう。序盤、中盤は「稀代の戦略家軍師」として戦場を駆け巡るのだが、フィナーレは大きな夢の実現で結ぶのだろうか。「稀代の経世家」になるのか気になるところである。戦の上手い「軍師」だけで終わっては勿体ない人物だ。もう一つ気になるところがある。大河

ドラマに女性の登場はつきものだが、それは誰で、どう演じられるのか。そして大河ドラマを一過性に終わらせることなく、現代のランドマークとして福岡城復元につなげたい。

☆ ☆ ☆

黒田官兵衛孝高(よしたか、後の如水)を扱った出版物は多い。「事実」を忠実に追おうとするもの、「創作」で期待の人物像を作り上げていくもの、それに「論評」で今の世相に結び付けていくものと、多彩である。逸話も多いが真偽もわかれる。

黒田官兵衛は生誕地姫路から始まって、因幡鳥取城兵糧攻め、備中高松城水攻め、山崎の合戦など、最初は、関西・中国地方が主舞台。それから四国・九州入り、関ヶ原の戦いを経て、福岡舞台となるのだが、如水は福岡で新しい時代をつくった。時代変わり・改革はいつも西から先導する。

この時代、女性は歴史の表舞台に

記録が残っていない。如水夫人「光(てる)」の方は「才徳兼備」と言われ、生涯唯一の妻で通した。夫婦合作の「世を経(おさ)め、民を済(すく)う」「経世済民」、大政治家の妻だったのではないか。永禄十年(1567年)、小寺家縁者の志方城



黒田二十四騎



長政所用
太水牛脇立兜



官兵衛の赤合子兜と胴丸具足

主櫛橋伊定(これさだ)の娘光姫(てるひめ)を娶る。生涯の伴侶となる。官兵衛22歳、光15歳。すでに伊定

から赤合子（あかごうす）の兜と胴丸具足が贈られていた。今に伝わっている。翌年松寿丸、後の長政誕生。

祖父黒田重隆（しげたか）は備前福岡で目薬屋としても財を成したとあり、黒田家活躍の財政基盤ができたのだろう。刀鍛冶の盛んなどころで目を患う人も多く、よほど経営戦略にたけていたのだろう。この「げんのいい」福岡の地名を後に、筑前福岡城の名に持ってきた。経済観念は黒田家のDNAとして、黒田孝高にも引き継がれ、備中高松城水攻め土木工事の経済戦略や優れた領国経営にも顔を出している。黒田官兵衛孝高は文武両道を身につけ、人望があり、人心掌握術にたけ、「黒田二十四騎」のような腹心を持つことになった。生涯、戦においても血を流さず、主君を裏切らず、農民・庶民を大切にした。後に、秀吉の泥をかぶり、豊前中津城内で長政をして宇都宮鎮房（しげふさ）誅殺、唯一の例

外に涙する。

「黒田官兵衛」孫子の兵法を実戦で

尾張から立ち上がって武力で天下統一を目指す「天下布武」を縹渺する織田信長と中国地方に勢力を張る毛利輝元との対立が先鋭化し、播磨はその接点になった。天正三年（1575年）どちらにつくべきか、御着城での小寺陣評定で、官兵衛は両総大将の力量・状況判断を見抜き、信長方支持を主張して決定した。孝高は岐阜城で信長に喝見、忠誠を誓い、この時名刀「圧切（へしきり）」を与えられた。同時に秀吉との堅固な関係ができ、戦線での主従関係、戦略軍師、あるいは協働攻略家として破竹の勢いを見せるようになる。後に有岡城幽閉事件を救う竹中半兵衛との無二の盟友関係もできた。お互い人物を惚れ込んだの結果だ。孫子の兵法は当時から広く知られていたが、官兵衛ほどその要点を実

行できた人も少ない。なかでも血を流さず、敵の大将を無傷で降伏させるのを上策とした「戦わずして勝つ」戦略を重んじ、「囲師必闕（いしひつけつ）」、追いつめても必ず逃げ道を開けておかないと、敵が窮鼠死戦を挑むので犠牲が多くなる。孫子の兵法は解ついても実行となると、武術だけではなく、彼我の戦力・人心、周辺地形、後方配備など多岐にわたる情報集約ができておらねばならず、また、人間の行動・判断の習性が身につけていなければ、なせる業ではない。そんな人物は少ないということだ。

官兵衛知略の勝負が続く。毛利方を秀吉方に落としていく播磨三木城兵糧攻め（天正六年～八年（1577～1580年）別所長治を討つ）、因幡鳥取城兵糧攻め（天正九年（1581年）吉川経家（つねいえ）を降す）、備中高松城水攻め（天正十年（1582年）清水宗治を落とす）

と続く「経済封鎖戦略」。綿密な情報収集、経済事情、地域・地形の把握、土木工事や大量動員にける人心掌握術がなければ兵糧攻めは成功しない。高松城攻略最終局面に起こった信長暗殺「本能寺の変」急報で、間髪を入れず「中国大返し」による京都進軍、山崎の合戦で明智光秀を討ち取り、「光秀の三日天下」で秀吉の天下統一の基盤を築いた。大量人員急送には食糧・軍需品まで扱う近代



豊臣秀吉

戦争の兵站の発想も必要だった。官兵衛のクライマックスは余人をもつてなし得なかったであろう。

織田信長の南蛮文化傾倒に新鮮な

興味を持っていた官兵衛は、やがてキリスト教に帰依して「ドン・シメオン」の洗礼名を受けるようになる。天正十一年（1583年）頃とされるが、宣教師から聞く西欧事情には官兵衛は目を見張るような関心を持ったに違はなく、後半人生で、国際情勢の中での我が国の立場という経世家としての視点を育むこととなった。如水は国際政治家でもあった。日本の内乱を治め、西欧植民地化から日本を救ったのは官兵衛だったといえれば言い過ぎだろうか。

黒田官兵衛と天下人

天正十一年（1583年）賤ヶ岳の戦いで勝利した秀吉は覇権を確立し、この後天正十三年（1585年）讃岐白地城に長宗我部元親を討つ四国平定、天正十四年（1586年）九州南下島津軍攻略と続いた。秀吉の天下は盤石のものになっていった。秀吉は本拠地として壮大な天守閣

を擁する大阪城普請に取り掛かる。

大阪城普請総奉行に官兵衛孝高を命じ、天正十一年（1583年）九月に始まる。官兵衛孝高が取り組んだ本格的城郭建設の第一号で、その規模、縄張り、壮麗さは群を抜いていた。この経験は後の大城郭建設の手法に繋がり、城造りの名手になっていく。天正十三年（1585年）秀吉は関白になった。ここまで来た秀吉は、官兵衛孝高をなくてはならない重臣であると思うと同時に、その才能を恐れるようになった。いつしか秀吉は天下を狙う立場から、守る立場になっていた。

官兵衛孝高はそれを十分に感じていた。天正十五年（1587年）豊前中津の城主として十二万石しか与えられなかった官兵衛孝高は、家督を長政に譲り、如水と号するようになる。天正十七年（1589年）秀吉の泥をかぶって、古くからの一帯領主だった宇都宮鎮房を中津城で

長政の手で誅殺させられた。さらに、文禄元年（1592年）に始まる朝鮮出兵「文禄・慶長の役」で秀吉と如水の間は離反していった。慶長三年（1598年）秀吉は没した。

石田三成・毛利輝元ら西軍と徳川家康ら東軍との間で戦端が開かれる情勢が確定になってきた。慶長五年（1600年）七月伏見城攻撃から戦いは始まった。すでに長政は中津城兵のほとんどを引き連れて東上している。

中津にあった如水は浪人を集めて召集軍を編成し石垣原で大友軍と戦い九州を抑えていた。黒田側は如水・長政親子とも東軍方と「黒田家譜」には書いてあり、如水の腹の内はそうであったとする見方もあるが、徳川の御代の「黒田家譜」の性格上そう書くのは当り前である。一方、最後まで如水が天下を狙っていたとする立場では、まだ東軍、西軍どちらにつくか旗色を鮮明にしていなか

ったとする見方もある。「関ヶ原」は一日で終わった。如水・長政の巧妙な戦略で世は家康の天下になった。

長政が得意顔で凱旋し中津城で如水に報告している。長政が「家康から三度手を取ってお礼を言われた」というと「その手はどちらの手か」と質問、それに対し長政が「右手でした」と答えると如水は「その時左手は何をしていたか」と言ったと『故郷物語』にある。事実とは思われないうのが定説みたいになっている。大見得の場でのエピソードはこんなものである。



黒田如水

黒田如水の本心は

信長・秀吉・家康の天下取り最前線の官兵衛は、自ら「大志」を抱き

ながら戦を天下人に集約してきた。中津時代、子長政に家督を譲り、如水と号するがその後も実質的な指揮は彼が執ってきた。では「大志」とは何であったか。如水が長政に残した言葉に、「神」・「主君」より「臣下」・百姓の罰恐るべし」というのがある。今様に言えば「国民・農民が苦しんで国が亡びる」ということである。五百年も続いた戦乱の世で農民・庶民は苦しんでいる。外国から見れば内乱国家だ。戦国時代に早く終止



福岡城 下ノ橋御門

符を打って、統一国家にしないと、アジアに押し寄せてきた列強諸国の植民地になる。

16世紀に始まる「大航海時代」、最初ポルトガルとスペインが逐次勢力を伸ばして植民地を拡大していった。1492年コロンブスの新大陸

発見後、1494年にローマ教皇アレキサンデル6世は、大西洋上に西経46度37分の子午線を引き、東側はポルトガル、西側はスペインと領域を決めた。1500年代にはポルトガルは逐次植民地をつくりつつアジアにまで到達してきた。ポルトガルが初めて日本にきたのは天文十年（1541年）豊後国とも、天文十二年（1543年）種子島漂着とも言われているが、「関ヶ原」の五十年ほど前である。植民地化の武器はキリスト教の布教という精神戦略と進歩した武器や文明利器だった。如水は宣教師からその辺の事情はよく聞いて知っていたと思われる。

ねたらいい。それが「大志」だったのではないか。三人の天下人を超える大政治家だった。

しかれば、最後にあの巨大な福岡城は何のためにつくったのか。如水は姫路時代から野戦城のつくり方と戦略、いわば戦いのハードとソフトは知り尽くしてきた。天正期の本格的城郭時代には大阪城をかわきりに戦略性に富んだ城をつくってきた。

大阪城、中津城、名護屋城、そして慶長期の福岡城である。城づくりの名手となった。同じく城づくりの名手と言われた加藤清正も福岡城を見て唖ったという。中津城あたりから水際の三角形の城をつくりだした。福岡城は赤坂山の地山をうまく使って一段高台に聳え立つ天守閣、隣接して本丸を築き、東方、三角形の先端との距離を取っている。何層にも組み合わされた石垣は見事で、しばしば「石城」とも言われる。城郭研究・模型復元に取り組んでいる筑前

城郭研究会長小田原早嗣氏によれば、隣接する二の丸「東御殿」は「本丸御殿」をはるかに凌駕する荘重な迎賓館みたいだったと。後に、天守閣

は徳川再建大阪城に、東御殿は江戸城に部材が転用された。そのくらい立派であった。また連立天守あたりの仕組みはヨーロッパのキャッスルの構造にヒントを得ていたのではないかと言う。また国内では例のない、経済都市博多と政治都市福岡の双子城下町の都市計画もヨーロッパ的だ。宣教師から城郭や都市づくりについても聞いていたことは十分考えられる。福岡城は後世、世が乱れた時の橋頭保ではあったが、発想はそれにとどまらない。当時北側の堀から海岸まではわずか400mほどであった。博多湾から見れば東西に広がる福岡城は低い武家屋敷と町屋の向こうに聳え立つ巨大なランドマークだったに違いない。これはどう見ても、外国船がやってきた時の威嚇、シン

ボルで、迎賓館も念頭にあったかもしれない。如水は、当時から五百年前まで、同じ地にあった鴻臚館の存在を知っていたに違いない。役割が同じだ。海に開かれた大福岡の原点がここにある。

物語の結末は福岡で、いずれも光(てる)の方と、「稀代の軍師官兵衛」



福岡城天守閣、本丸、南二ノ丸 模型 小田原早嗣氏

が余生を静かに過ごす」のか、それとも「稀代の経世家如水として後世への仕上げをする」のか、二つに分

かれる

それは最後まで如水は天下人を狙っていたのか、その気はなかったのかということでもある。両説がある。

(2013・5・10 寄稿)

軽くなったのか？

ノーベル賞

株式会社中陽 相談役

豊田 信夫 (新？回)

世界が驚いた2012年の京都大学の山中伸弥教授のノーベル医学生理学受賞のニュース、驚いたという意味は「創造力に富んだ革命的な実に素晴らしい発見」という意味で世



界中の誰もが異論を唱えない称賛で

ある。一方世界が驚いた2009年のオバマ大統領のノーベル平和賞受賞のニュース、驚いたという意味は「時期尚早で現職大統領が実績を伴わない称賛を浴びるべきでない」という気持ちが含まれている。オバ

マ大統領ほど受賞に異論が噴出した例はない。2009年4月5日にブラハで行った核兵器廃絶演説が評価されたのが発端だが、「言うは易く行うは難し」というのが核兵器廃絶である。「オバマ大統領がノーベル平和賞を受賞するのは一寸早過ぎるんじゃないか？」とポーランドの民主化運動を主導し1983年に平和賞を受賞した同国のワレサ元大統領が漏らした感想は世界の世論を代表しているのではないか。『核なき世界』、それは理想論の範疇で事実上不可能ということは誰もが思っている。ノーベル物理学賞、化学賞、医学生理学賞等は「なぜ受賞するの？」という疑問符がつかない。それは成

果が形に現れ、客観的に判断できるからである。平和賞、文学賞等は主観的に判断され客観性がないので、たいがい評価が分かれてしまうから「何故受賞するの？」という疑問符がつきまとう。

2009年のノーベル賞の選考過程では、ノルウェーのノーベル賞委員会の委員五人の内三人がオバマ大統領への授与に異議を唱えていた。委員長の説得で三人は最終的に賛成に回ったという。ノーベル賞選考の舞台裏は案外いい加減なものだなあというのが実感である。

そもそもノーベル賞選考委員は世界中で活躍している人物に対して、どれほどの情報や知識を持っているのだろうか。情報不足で第三者の推薦によるもの等を選考の俎上に載せることが多いのではないか。

ミャンマーの民主化運動指導者アウン・サン・スー・チーの生涯を事実に基づいて描いた映画『アウン・サン・スー・チー』の中で、病気で

ロンドンに別離している彼女の最愛のイギリス人の夫が、知人のノーベル賞委員会の委員長に妻をノーベル賞に推薦してくれるよう要請する場面がある。彼女の受賞に異議を差し挟むものではないが、ノーベル賞選考決定の舞台裏では、個人、団体に対する多数の推薦は致し方ないにしても、特別なコネクションがやはり物をいうのかなと思った。

2012年のノーベル文学賞は下馬評一位の日本の村上春樹を押しつけて、中国の作家莫言（モー・イエーン）に決まった。直前のイギリスのオッズでは日本の村上春樹が一位で莫言は三位だったというから予想を覆す大逆転だ。莫言の受賞は中国国内の文化人の間ではそれほど評価されていない。莫言氏は中国共産党員で党の指導下にある中国作家協会の副主席を務めており、これまでも「体制側の作家」との批判が出ていた。2009年の同賞受賞者であるドイツ

の女性作家ヘルタ・ミュラーさんがインタビュで「莫言氏は中国政府による検閲を称賛しており、受賞決定は破滅的だ」と痛烈に批判した。文学賞も平和賞同様異論続出である。本来は華々しいノーベル賞授賞式だが莫言氏ほどバッシングの中で受賞したのは前例がない。ノーベル賞は世界最高の賞だから、平和賞も文学賞も出来るだけ多くの人々が納得し、異論続出を最小限にして欲しいものだ。

過去のノーベル平和賞受賞者を振り返っても、不思議に各国の政治のトップばかりが名を連ねている。1906年のルーズベルト米大統領、1971年の西ドイツのブランド首相、1974年の日本の佐藤栄作元首相、1983年のポーランドのワレサ元大統領、1989年のチベットの仏教の最高指導者ダライ・ラマ14世、1990年のソ連のゴルバチョフ大統領、1994年のPLOの

アラファト議長、2001年の国連アナン事務総長、2002年のカーター元米大統領、2009年のオバマ大統領等である。受賞理由も漠然として受賞後に問題発生することが多く、諸手を挙げて賛成できない人が多い。佐藤栄作元首相は非核三原則の提唱で首相退任二年後に受賞したが、『核を作らず、持たず、持ち込まない』の三原則の『持ち込まない』は日米の密約で国民を欺き骨抜きになっていたのは今では周知の事実である。オバマ大統領はテロとの戦いで、無人機でテロリストを殺害すると同時に多数の罪のない民間人の命を犠牲にしている。

ノーベル賞委員会は著名な政治家でなくても平和賞の候補として検討に値する人物を世界の隅々から広く探すべきであろう。日本で言えば、例えばアフガニスタンで人道支援を続ける非政府組織ペシャワール会の現地代表の医師中村哲氏（66）など

はどうであろう。1984年からパキスタンやアフガニスタンで診療活動をしてきた中村哲氏は『飢えと渴きは薬では治せない。ほとんどの病気は十分な食べ物と清潔な水があればかからない』と言ってアフガンの戦火と日照りによって荒れた大地で用水路建設に着手、七年かけて25・5キロの用水路を完成、3千ヘクタールの農地が蘇り60万人の農民が暮らしを取り戻した。このような人物こそノーベル平和賞に値しよう。

（2013・4・24 寄稿）

今年度総会開催日決る！

日時:10月5日(土)

16:00~19:00

場所:福岡市天神

中華菜館「福新楼」

詳細については8月中旬頃にお知らせし

ます。奮ってご参加ください

素数ゼミの話

尚綱大学学長

大羽 宏一(新13回)

私は現在、熊本市の尚綱大学という女子大で管理職をしています、私の前任者は発生生物学会の泰斗である江口吾朗先生(元熊本大学学長)という方でしたので、生物学についての四方山話を聞く機会がよくありました。その中でもっとも印象に残っているのは、数年前に教えていただいた「素数ゼミ」の話でした。素数ゼミといっても生物学に係わっておられない方はピンとこられないと存じますが、その際の江口先生の話では、アメリカに生息するある蟬の種類は13年や17年という素数の周期で大発生するということで、またそれを研究している日本の学者がいるということだったわけです。

経営学の一ジャンルのリスクマネジメントが専門領域である私として

は生物学に関してはまったくの門外漢でしたが、この素数(1とその数でしか割り切れない自然数)の周期の年にしか発生しないという素数ゼミには大変に興味を引かれたので、インターネットで調べた結果『素数ゼミの謎』(2005年 文芸春秋)という書籍が発行されていることがわかり、その時この書籍を購入しました。吉村仁という静岡大学教授の方が記述されたこの本は、イラストも多く素人にも分かりやすいように書かれていました。

我が国のアブラゼミやミンミンゼミは、幼虫の間6〜7年も地中において、その後羽化(成虫になること)し、二週間で生涯を終えるようです。一方、吉村仁先生によるとアメリカの一定の地域にいる素数ゼミは、13年または17年の周期に一度だけいっせいに羽化するようです。自分の種類を存続させ、絶滅の危機をできるだけ避けるために、他のゼミと

の競争をしないような生存選択をした結果、素数の周期で発生するというその種類独自の発生リズムを作りあげたということのようです。

ところで、先日、朝陽同窓会から送付いただいた朝陽62号(本年5月刊行)を見ていましたら、この書籍の筆者である吉村仁先生が「進化からみた生態」と題し、ご自分の素数ゼミの研究に至った経緯をお書きになっていました。なんと高校25回の同窓の方だったようで、大変な奇遇と思った次第です。「最近は、生物進化から国際経済まで論じた著書も出版している」とのことですので、今度機会をみてお目にかかってご意見を聞きたいと思っています。

(2013・5・22 寄稿)

事務局からのお知らせ

・今年度総会

別記(7ページ)のとおり今年度総会開催の日時・場所が決まりました。

・年度会費納付のお願い

五月末日現在三名の方が未納です。三名の方には振込取扱票を同封していますので至急納付をお願いします。

編集後記

今号は石井会長からの力作寄稿があり、8ページになりました。本文にもあり、予てより会長が進められている福岡城の復元再建が具体化しつつあるやに聞く昨今、来年の大河ドラマが黒田如水に決まったことはまさに追い風、福岡市の人口も150万を超えいよいよ大都市の仲間入り、地下鉄七隈線の博多駅延伸工事も始まる、さらに福岡城復元が現実化すれば観光商業都市福岡の未来は明るい。石井会長の一層のご活躍と皆様のご支援を期待しています。

【発行元】

九州朝陽会事務局

福津市若木台1丁目

20-7

Tel/Fax: 0940-43-5545

Mail: kjun612@nifty.com

【編集者】

九州朝陽会 幹事長

小泉 純理

(新7回)